

雪と氷



例年にない暖冬で、長野オリンピックの雪不足が心配されていたが、やはり自然はそのままでは済まされなかった。正月気分も抜けたばかりの十五日、鹿児島は殆ど雨だったが東京は大雪になって、雪には弱い現代の都市ぶりを露呈している様がテレビで報道されていた。私も東京での大雪の思い出が何回かあり、社内放送の電車の状況に耳を傾けて帰路の心配をした当時と少しも進歩していないことに呆れながらも、懐かしく思い出す。

私の故郷の信州諏訪は、寒さは厳しいものの豪雪地帯ではない。それでも私の子供の頃は、今より寒く、雪も30センチ位積もる日が年に何回かはあつて、長女の私は板に長い柄の打ち付けられた「雪揺

き」で、朝には家の前を掻かされたものだった。日が出る時、大抵は溶けてぬかるみになってしまつが、電柱や樹の根元に掻き寄せられた雪の塊はいつまでも残り、日陰のものは三月末頃まで残っていた。

当時は諏訪湖も全面結氷して、湖面に一列の大きな亀裂の入る御神渡り（おみわたり）が見られ、その夜の地鳴りのような轟音も懐かしく思い出される。地球が温暖化した現在では殆ど結氷もしなくなったようだ。

当時、私たちの冬の体育は諏訪湖でのスケートで、厚い木で作られた下駄に刃の付いた下駄スケートを紐でわらじのように足に結わえて滑るのだった。その紐は3センチ程の幅の帯地のようなしつかりした紐で、それで下駄スケートを首から左右に掛けて隊伍を整えて小学校から諏訪湖までの一キロ程の道を歩いたものだった。それは全学年の生徒が曜日や時間をずらして出掛けるのだった。

湖面には、各学校単位に二つか三つのリンクが作られていて、引率された生徒は、その脇で下駄スケ

ートに履き替えて滑るのだった。諏訪湖は水中からも温泉が何箇所も出ていてそこは直径30センチほどの穴が開いている危険なのでそこには赤旗が立てられていたが全てに立っていた訳でもないのだろう。繰り返しリンク以外では滑らないようよう注意されていたにもかかわらず、リンクでは満足しない人が諏訪湖横断を試みるのだろうか、「釜穴」と呼ばれたその穴に落ちて死亡したというニュースを聞くこともよくあった。ズッポリと落ちると、氷の下になつて落ちた小さな穴には戻れないという話だった。

就学前までを東京で育ち、祖父母と諏訪に移った私は、小学校時代は病気がちで、学校をよく休んでいたし、運動神経は人一倍鈍かったので、スケートも下手だった。大勢の人の乗った氷がゴトと鳴ったりするととても怖くて、もし割れて死ぬようなことがあつても、これだけの人と一緒なのだからと自分に言い聞かせて固くなっていた。

終戦の翌年、諏訪高女最後の女学生となつた。学校にはスキーが何台もあり、希望者は借りることが

出来た。またいとこの長野市で病院長をしている小林正樹さん、東大卒業後筑波大の経済学の教授になつた小林弥六さん兄弟が、私と弟を霧ヶ峰へスキーに連れて行ってくれたことがあつた。正樹さんは松本医専の学生、私と同じ年の弥六さんは諏訪中学に通っていた。

終戦直後のこと、お弁当とスキーを担いで歩いて霧ヶ峰まで登るのだ。私と弟は途中で音を上げてしまった。結局小林兄弟が二人分担いでくれてなんとかスキー場までたどりついた。リフトのない時代のこと、スキーを履いて逆八の字にパタパタとやつと上まで登つても、滑り下りるとなるとあつという間に下である。それでもスケートにはない爽快感がたまらなくて、また懸命にパタパタと登るのだった。それからも何回か連れていつてもらった。猪谷千春という名を教えてくれたり、ワックスの難しさを教えてくれたのも弥六さんだった。

その当時、わが家の西隣は市役所だった。終戦後四五年経つて、少し落ちついて来たのか、市が日曜

日にトラックにスキー客を乗せて市役所前から出すことになった。ある日、弟と私はそれに乗って一日遊びほつけて帰って来た。すると夕食にいつにない御馳走が並んでいる。聞くと私たちの後から出発したトラックが途中坂道を転落して、死者が出てしまった事件があつたとのこと。すっかり心配した母が私たちが無事とわかつて大喜びしての御馳走だつたのだ。

霧ヶ峰に昭和寺を建立した父母からお正月を一緒にと呼ばれ、懐かしい母の料理に舌鼓を打ってから何年になるだろう。あの雪の山の正月は毎年続くかと思われたのに、その父母は既に亡い。昨日の電話では、父の遺志を継いだ三男大圓が一人で昭和寺前の雪掻きに毎朝汗を流しているということだ。